

小学校教育と連携した農地・水・環境保全組織主導の地域教育の取り組み －山形県河北町元泉地区の事例から－

Approach of community-based organization in cooperation with elementary school education

－ A case of Motoizumi, Kahoku Town, Yamagata pref.－

嶺田拓也

MINETA Takuya

1. はじめに

山形県河北町の元泉地域農地・水・環境保全組織では、これまで「めだかの学校」を開設し、地域の子供たちに対する環境学習や農作業体験活動を実施するなど、子供を「地域の橋渡し役」として位置づけ、積極的に地域や農村の魅力を伝える活動を継続してきた。元泉地域の農地・水環境保全管理支払交付金による地域資源の適切な保全・管理に向けた取り組みは、平成 25 年度食料・農業・農村白書にも紹介されるなど、地域の持続的・自律的発展に向けた実践が高く評価されている地区である。一方、元泉地域では農研機構農村工学研究部門が開発した農地基盤地理情報システム (Village Information Management System: VIMS) を用いた GIS による地域資源の記録や管理にも積極的に取り組んでおり、トンボやカエルが豊富に見られる地点など生物情報の登録も進んでいるところである。

農地・水・環境保全組織では、取り組みで最も重視している地域資源の次世代への継承をさらに推進するために、元泉地区を学区に持つ小学校と連携し、平成 27 年度からクラブ活動のカリキュラム枠内で、田園農地周辺の自然、歴史、文化的資源を町内の子供たちとともに再発見するプログラム「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」を開始した。この取り組みの計画策定と実施には VIMS の活用も視野に入れながら農研機構農村工学研究部門も協力している。そこで、「子ども博士」の取り組み活動の紹介とともに、GIS (VIMS) を含め、デジタルコミュニケーション活用に向けた課題などについて報告したい。

2. 「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」の取り組み

元泉地域農地・水・環境保全組織では、平成 20 年から「田んぼの学校」活動に取り組み、地区の子供たちに生きものや景観などを通じた地域の魅力を伝えてきた。しかし、活動はイベント的であるため、地域教育として恒常的な取り組みの必要性が高まり、地元小学校との連携を平成 26 年から農地・水環境保全組織会長らが中心となって検討してきた。元泉地区を学区に持つ河北町立 Y 小学校との話し合いのなかで、高学年 (4～6 年生) を対象としたクラブ活動 (5 月から 11 月にかけて全 10 回、45 分 5 回、90 分 5 回) 枠で、元泉地域農地・水・環境保全組織が全面的に設計・支援するクラブ「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」を開設することとなった。講座のコンセプトは、今後の地域を担う次世代の子供たちに元泉や河北町の生活基盤である里地農地周辺の自然、歴史、文化的資源を再発見・探求するプログラムを通じて、「ふるさとの誇り」を醸成し、ふるさとが大好きな子供たちを一人でも多く育成するとし、所定の課程を修了した児童には修了証書や「おらだ田んぼの博士号」を授与することとした。また、主な活動場所は元泉地域内 3 カ所の“めだかの学校”水田やその周辺とし、現地活動に際しての保険や特別講師に対する経費等は農地・水・環境保全組織が負担した。初年度 (平成 27 年度) の内容は、河北町の基幹産

業であり土地利用面積も最も多い水田に集う生物の賑わいを体感してもらうことをねらい、生きもの調査中心のプログラムを組むと同時に、GIS 的な視点に馴染んでもらうために観察した生きもの等を「生きものマップ」として最後にまとめるカリキュラムとした(表 1)。

平成 27 年度の参加児童は全 24 名(小 4 : 7 名, 小 5 : 13 名, 小 6 : 4 名)で、活動単位は班当たり 4 名構成の 6 班とし、野外活動時には各班にデジタルカメラを持たせ、観察した動植物や気になった地物などを撮影してもらった。「生きものマップ」づくりでは、児童たちの撮影写真を元泉地区の航空写真を拡大して印刷した模造紙に撮った場所を思い出しながら貼ってもらい、各班の発表では印象に残った生きもの等について紹介した(図 1)。

表 1 「おらだ田んぼの子ども博士養成講座」カリキュラム(平成 27 年度)
Curriculum of the region education, 2015

回	実施日	内 容	活動枠	
			90分	45分
1	5月28日(木)	オリエンテーション		○
2	6月11日(木)	めだかの学校「中部小学校分校」の生きもの探し		○
3	6月18日(木)	春の田んぼの草花探し	○	
4	6月25日(木)	初夏の田んぼの生きもの調べ	○	
5	7月2日(木)	めだかの学校「中部小学校分校」の草花調べ		○
6	9月17日(木)	秋の田んぼの生きもの探し	○	
7	9月24日(木)	秋の田んぼの草花探し	○	
8	10月15日(木)	秋の田んぼの生きもの探し	○	
9	11月12日(木)	参加者自慢の「生きものマップ」づくり(1)		○
10	11月19日(木)	参加者自慢の「生きものマップ」づくり(2)と振り返り		○

3. デジタルコミュニケーションツールの利用と課題

デジタルカメラ(ニコン COOLPIX S3700)を用いた活動では、子供たちは簡単に操作に慣れ、撮影に困ることはなかった。カメラは長めのストラップを通し、首に掛けて利用し、ストラップが長すぎる場合には調整したので、活動中に邪魔になったり危険となったりする様子は見られなかったが、1機振り回した際に破損した。また、撮影した写真の約半数はピンぼけだったり、友人同士を写しあったりしていて、「生きものマップ」作成には適当な写真を事前により分ける作業が必要となった。しかし、素晴らしい写真も何枚もあり、観察した生きもの等の記録や子供たちの感性を表現する上では、児童に自由に撮影させることも重要であり、児童のデジタルカメラなどの利用には撮影後の画像チェックを折り込まなければならないだろう。また今回は、ハードやシステムの準備が整わず試行できなかったが、今後はデジタルカメラに装着した GPS モジュールの記録から各班の活動軌跡や撮影画像を VIMS など GIS に登録し、モニター上での「生きものマップ」等の表現も予定している。しかし、紙ベースでの作業を観察すると、会話を交わしながら各人が分担して写真を切り貼りしたり、模造紙に思い出を書き込んだりする作業が随時見られ、アナログ環境でのコミュニケーション活性をデジタル環境下でも担保するような工夫が必要と考える。

図 1 児童が作成した「生きものマップ」の例
Example of "Ikimono map", children created

